

装備と食料

冒険に出発した時に持っている装備は、そう多くはありません。《悪魔の書》は、あなたが力尽きた時に悪の召喚士が手に入れてしまっただけではならないので、持っていくことができます。

まず、『ソウルキャンディ』と『血の石』、金貨20枚が背負い袋に入っています。冒険には何かとお金が必要です。食事や宿、買い物や、時には賄賂が必要なものもあるでしょう。20枚の金貨は少し使えばすぐになくなってしまいますので、手に入れる機会を逃さないようにして下さい。

武器として『小刀』(腕力でなく魔力を使って相手を傷つける魔法使いのナイフ)を持っていますが、武器は一つしか装備できないことを忘れないで下さい。技術点が1上がる魔法の剣を二つ装備して、技術点が2上がるようなことはありません。

そして最後に、あなたは**2食分の食料**を持っています。これは大変心もとない数字です。決してむだにせず、一刻も早く食料を調達しましょう。

食料は、時間が経過したときか、指示のある時にのみ食べることができ、体力点をそこに書いてある数値分回復することができます。食料は、一度に1食だけしか食べることができません。

はじまり

目がさめると、そこは暗い城の玉座の上でした。

たしかあなたは城の「試練の玉座」に座って合言葉の歌を唱え、雲の上の世界でああなたの心の《友人》に会い、扉をくぐって時を下り……。

そう、ここは遙か「千年前の世界」のほうです。九歳のあなたは、超古代の世界でひとりぼっち……。あなたを助ける《友人》の声も届きません。

「美味そうな人間の餓鬼だあ」

玉座の横から、体中に口の付いた巨大な悪魔が突然現れました。彼は首の下に付いた口を開けて、あなたを丸飲みしようとして覆いかぶさってきます。

残念、千年王国の旅は数秒で終わりを告げました——と思いきや、ガチン、と目の前で歯が打ち合わされました。ヨダレがちょっと顔に飛んできます。

「王だ、馬鹿め」

巨人は槍を持った武人に片手で持ち上げられていました。どうやら、間髪で助かったようです。暗闇に目になれると、そこには見渡すかきりの悪魔たちが勢ぞろいしているではありませんか！

「馬鹿はお前だ。鼻を垂らした王などいるか」

あなたを助けた武人に、フクロウの顔をした悪魔が殴りかかります。武人はそれを片手で受け止めたが、物凄い音が部屋中に鳴り響きました。武人の踏ん張った地面がえぐれ、ひび割れています。他の悪魔もちらほら、フクロウの悪魔に同意します。

「おっしゃるとおりだ。そんな子どもに我らを統べる資格があるのか？」

異を唱える彼らに視線を向けると、あなたと視線を合わせて微動だにもしません。

玉座のすぐそばに立つ童人が地響きのような声を出しました。

「無礼者ども。王の魔力を感じ取れぬのか。それほどの愚鈍ならば、いつそ地獄へ還してやるぞ」

後光の差す女が童人をたしなめます。

「祝いの席でいさかいはおよしなさい。ソロモンに代わる魔王の誕生をただ、喜ぶのです」

ソロモン——その名を彼女が口にするまで、あなたはすっかり自分の試練を忘れるところでした。《友人》は確かにあなたに言いました。「一千年の時をさかのぼり、ソロモン王とイラジエルの国を救って下さい」

驚いてばかりはいられません。まずあなたは悪魔たちの集結のわけを聞こうとしました。しかしあなたが話かけると、悪魔たちはあなたの言葉そつちのけで大いにさわめき始めました。

どうやらこちらが悪魔と会話できることが彼らにとっては大きな事件らしいのです。「ソロモンでさえ、疎通は困難であるのに」

悪魔たちはさわめいて、あなたの言葉を聞いてくれません。

なんとか彼らの言葉をまとめると、「悪魔たちを地獄から召喚したソロモン」が、「約束を果たさず」に、「18日後に死を迎えようとしている」ので、「約束の地を手に入れるため」に、「侵略の準備を整え」て、「知恵の悪魔が予言した『王の誕生』を待っていた」とのことでした。

あなたは腰が抜けそうになりました。

ソロモン王は死にそうになっていて、あなたを待っていた理由は人間どもを滅ぼすためだというのですから。悪魔の一人が焦れたように叫びました。

「我らは、ソロモンの約束してくれたその『魔天』という地へ行きたいのだ」

『魔天』とはどういう地かと聞くと、彼らは口々に勝手なことを言い始めました。

望むものは何でも手にはいる、好きなだけ人間の魂が食える、だれしもが王になり好き放題に生活ができる——。そんな彼らを見て、黒い鏡を身につけた悪魔が首を横に振って言いました。

「ソロモンは、全ての悪魔が永遠に生きられる、果てなき楽園を提供する、と言ったのだ」

彼の話では、彼らはソロモンに誘われてこの世界にやってきましたが、この城の外に出ると長

く生きられないので困っているのだといいます。

それを受けて竜人が言いました。

「我らはこの地でソロモンと共に活躍するうち、この世界が気に入りました。王よ、魔天への道を開いてください。そこでなら我らは生きられるし、魔天とこの世界は次元が近く、自力で行き来できるらしいのです」

竜人はまっすぐにあなたを見つめています。あなたは彼らに、「君たちに助けてもらった恩は忘れていない。できるだけのことをする」と約束してあげました。

悪魔たちはざわざわと、あなたの返事にどよめきました。

なにしろ、あなたが助けてもらったのは千年後の話で、彼らにとつては身に覚えがありませんし、なにより悪魔たちはこれまで恨まれこそすれ、感謝されることなどはじめてだったのです。

「食べてしまうか……いや、もし本当に王なら、魔天へ連れて行ってもらえる……」

どうやら悪魔たちはあなたを扱いかねているようでした。

「メフィスト、アモン、アシユメダイ。ヨウコ、ウシヤス、バルビュート」

とりあえずあなたは十二の悪魔たちの名を呼び、残りの悪魔たちをまとめて欲しいと願いました。

「光栄に存じます。このメフィストフェレス三世、力の全てをもって、あなたのために働きましょう」

竜人があなたの前に歩み出て、ひざまずきます。名を呼ばれた残りの悪魔もそれにならない、あなたの前に歩み出しました。選ばれた十二の悪魔は皆、満足げな、誇らしげな顔をしています。

「さすがに王だ。よくぞ、一瞥いちべつしただけで我らの実力を見抜いてくれた」

どうやら彼らは、最初から七十ほどの悪魔たちのリーダー格であったようでした。ただ、最後の悪魔バルビュートだけは、その場に姿を見せていないようでした。

とりあえず騒ぎはおさまったようです。

どこかで見たような光景だな、と思いながら、あなたは全ての悪魔に命令します。

——「行こう」。

「バルビュート、待ちなさい」

悪魔と城の外へ一歩ふみ出ると、鈴を鳴らしたような声があなただを呼び止めました。

それはあなたと同じくらいの年頃の、人間の少女でした。

「めまいがするような魔力……。あなたが悪魔の王——バルビュートね」

あなたをバルビュートと呼んだ少女は、目が覚めるような外見をしていました。濡れた大きな

瞳と高い鼻、赤い唇が特徴的で、丸く美しい額がその顔立ちをさらに女性的に見せています。赤い髪に、目立つ色の髪飾りがよく似合っていました。

彼女の後ろには背の高いひよろつとした青年が立っていました。それはエルフでした。まばゆい金の髪はなびき、目鼻立ちにはっきりとして、長い手足はどれも見事なほど整って見えました。エルフと不思議な少女は、あたかも似合いの仲間であるように思えました。

「私はアグリア。召喚術師よ。それにしても驚きね、悪魔の王がこんなに小さいなんて」

少女アグリアは、さらりとこう続けました。

「バルビュート、私を好きにしなさい。その代わり、私の願いを聞いて」

フクロウ頭の悪魔が空に巨大な火柱を吹き上げながらあなたに怒鳴ります。

「好きにしろなあ？ この餓鬼も何か変な感じがしやがる。おい、殺すなら俺にやらせてくれよ」
張り詰めた空気が火花が散りそうです。少女の頬から汗が滴り落ちます。

「聞き入れてもらえなければ——」

その唇からさらりと、笑みがこぼれました。

「力づくで聞いてもらいます」

アグリアが両手を前に突き出して目を瞑ります。

「エロヒムよ、エサイムよ。神であり、悪魔である者よ、わが呼び声を聞け！」

すると、その両手のあいだからまばゆい閃光がほとぼしり、あなたやその後の悪魔たちを白く塗りつぶすように照らしました。エルフが光から目を背けながら叫びます。

「アグリア、よせ！ 神を呼び出すのは危険すぎる！」

すぐに、光の拡散が収まりました。そこには十二枚の黒い翼を持つ、目を閉じた魔神が浮かんでいました。羽はたきもせずそこに留まっています。

なにより恐ろしいのはその神々しさでした。それはまるで、闇夜に輝き人を惑わせる妖星の様です。眺めているのが怖いほどでした。

時が止まったような静寂。いつまでも眺めていたいような見てはいけないような——。

「どうした、誇り高き王たちよ。小娘に従う小悪魔に、よもや臆したのではあるまいな？」

その静寂を打破ったのは、あなたに従う悪魔の翼人でした。彼は天使の姿をしていながら、口元には馬鹿にしたような皮肉な笑みを浮かべています。

「けしかけるのはお止め下さい。ルキフェル様は共に戦った仲間ではありませんか」

仲裁に入ったのは、死神のような鎌を持つ悪魔でした。彼もまた、天使のように見えました。あなたはルキフェルに非礼を詫び、争うつもりはない事を伝えます。